

説教「ルツの真心とボアズの責任」

ルツ記 3 章

1999.7.4

日本バプテスト同盟 関東学院教会

7 月最初の主の日の朝を迎えました。梅雨の最中^{さなか}にあります。ここに共に集い、主を礼拝しほめたたえる幸いを感謝します。ご出席の皆さんの上に、ご家族の上に主の慰めと平安がありますように、主の御名^{みな}により祝福します。

今朝はルツ記の 3 章を朗読していただきました。それは、ルツとボアズの間^間に決定的な出会いが行われた、という出来事をめぐって展開しております。前回の 2 章においては、ルツが^{しゅうとめ} 姑 のナオミさんを養うために落穂拾いに出かけたところが、たまたま拾わせていただいた畑がボアズという人の所有地であり、そこでボアズはルツに会い、親孝行なルツに感心し、色々と親切に扱ったのであります。

そして、ルツがずっしりと重い大麦の袋を持ち帰ったのを見たとき、またその畑がボアズの畑であり、ボアズから特別に目をかけてもらったことを知ったとき、ナオミのそれまでの苦しみや悲しみが一転して、まぶしいほどの主の導きの御手^{みて}を確かに見たのであります。そして、その人に神の祝福があるようにと、喜びに^{あふ}溢れたのです。ナオミは、ルツがたまたま落ち穂を拾わせてもらった畑がボアズの畑であったというそこに、ナオミは見えざる神の導きの御手をはっきりと見たのであります。

このように、信仰は、お先真っ暗でどこにも何の助けもないと思われる、そんな時にも見えざる神の御手が確かに働いておられるということを信じることであります。それは、自分の思いを超えた恵み深い神の導きであります。その神の御手の働きを信じるのが信仰であります。

今日の 3 章においては、信仰におけるもう一つの面があることを教えています。イエスさまは「求めよ、さらば与えられん」(マタイ 7:7) と教えています。信仰におけるもう一つの面とは、^{みづか}自ら神に願い求め、自分の方から神に働きかけることが必要なのであります。

3 章において、ナオミは、神がルツをボアズの畑でボアズ自身に出会わせてくださったことを、神の不思議な導きと信ずることができました。しかし、そこに止まってはいませんでした。ナオミさん

は、ルツがボアズと出会ったことを知ったときからずっと、ルツとボアズの出会いをどうしたら実りあるものにすることができるだろうかと真剣に神に祈り続け、その時を待っていたのに違いありません。

大麦の収穫の始まった頃から さらに小麦の収穫が完了するまで、おそらく 1 ヶ月半か 2 ヶ月近く、ルツは毎日のようにボアズの畑で落ち穂を拾わせていただいていたいました。小麦刈りの収穫が終わると、すべての穀物の収穫が完了するのでありますが、そのときナオミは一つの決断をします。そして、ルツに次のように命じるのであります。

今夜、ボアズが大麦の収穫を終えて 畑で収穫の祝いをするため、山と積まれた穀物の端で一晩休むことにしていると知ったから、あなたは体を洗い、香油を塗り、綺麗な衣装を身に着けて、ボアズのところへ行きなさい。そして、ボアズに求婚しなさい、と言うのです。

ナオミは、ボアズがルツに心を惹か^ひれていることを知っておりました。あとは、ルツを直接 ボアズと合わせ、結婚の願いを告白させることがどうしても必要だと判断したのです。

ナオミは、ルツがそうするならば、必ずうまく事が運ぶに違いないと確信していました。ルツに命じたとあります。「命じた」(6 節) と強い表現で言われているには理由がありました。ボアズはナオミの死んだ御主人エリメレクの親戚に当たるので、エリメレクの先祖伝来の土地を買い戻してやること、さらには古くからの規定にあるように、主人が子どもを残さずに死亡してしまったときは、死んだ主人の兄弟か親戚の男がその未亡人と結婚をして、その家を継ぐ子どもを残してやるのが義務となっていました。

たといそれが義務であっても、その責任のある親戚の男がその未亡人と結婚したくないと言うなら仕方ありませんから、彼の次にそうする責任のある男にそれを引き受けてもらうという順序がありました。で、ナオミは、ボアズこそルツと結婚をして、失われようとしているナオミの土地と家系を再興してくれる人に違いないと確信したのです。

おそらく、ナオミさんは神に祈り求め、自分の土地を買い戻し、ルツと結婚してくれる人が与えられるようにと、ルツに相手が与えられ、幸福になることをひたすら願い祈ってきました。

今、それが実現する絶好の機会が訪れたのでした。ナオミがルツに今晚 ボアズの畑に出かけて行くことを命じたということは、それが神の御心^{みこころ}であることを確信したからに違いありません。また、このナオミのはっきりした命令なしには、夜中に男のところへ若い娘ルツが独りで出かけたりすることはありえないことであつたからです。

ボアズはそんな計画があるとは知らず、畑に山と積まれた穀物のそばで食事をとり、ぶどう酒を飲み、穀物の夜番^{よばん}をする目的で一晩、そこで野宿をしたのであります。ナオミはそのような収穫の習わ

しをよく知っていたので、ルツにそこに出かけるよう、しかもボアズ本人に知られないように、あらかじめその食事をする場所をルツに見届けさせました。

彼が良い心持ちになって寝静まってから、彼女がひそかにその場所に忍び寄り、ボアズの足元に自分の体を寄せて、言ってみれば添い寝をするように、つまりそういう形で求婚の意思を表示するよう、事細かにルツに指示を与えます。

それから後のことは、ボアズがあなたに言うでしょう。ルツは女の一生一代の冒険、賭けをするように命じられたのです。

ルツは言われたとおりにするのですが、その行為が首尾よく運ばれるかどうかルツ記を読む人に一つの緊張感を与えています。ナオミの家が絶えてしまうか、あるいは首尾よく彼女の家系が再興されるかどうかは、一つにルツの肩に懸かっていたのであります。

ルツはあたかも結婚式に臨む花嫁のように着飾って、ただ一人 畑に出かけました。そして、ナオミの指示したとおりに実行し、ボアズが寝静まった足元の裾をまくり、体をもぐり込ませたのです。

夜半、ボアズは何か恐怖を感じ、足元を手探りしてみると、良い香りを漂わせた一人の女が寝ているではありませんか。「あなたは誰だ」、驚いて暗がりの中で声をかけると、9 節「わたしはあなたのはしため（女奴隷）ルツです。あなたの衣の裾でわたしを覆ってください」と言います。これは、私と結婚してくださいという意思表示であったのです。

ルツがボアズに言った次の言葉が大事です。あなたは家を絶やさぬ責任のある方です。原語は、あなたは「ゴーエール」ですという一語です。直訳すれば、あなたは“^{あがな}贖う人”ですということです。ある人の家が落ちぶれて、土地を失うというとき、親戚の誰かが彼の借金の肩代わりをして支払って、彼や家族が先祖伝来の自分の土地を出て行かず済むようにする人、あるいはこのナオミの場合のように、子どもがないまま主人が死んだ場合、未亡人と結婚して子どもを残して、その家を再興する人のことを「ゴーエール」というのです。

ルツはこの両方の意味を含めて、あなたはゴーエールですと言いました。ボアズは、この目的のため、夜半に危険を冒して ボアズのもとに身を寄せてきたルツを心から歓迎したのであります。3 章 10 節、「あなたは主に祝福されています。あなたは若い男に魅力を感じて ^ひ心惹かれることもなく、このわたしに求婚してくれた」。このボアズの年齢は確かではありませんが、中年のおじさんということにしておきますか。

あなたは若いのにこのおじさんを頼りにして、真心を示してくれたと言っています。この真心と訳されている「ヘセド」は元来 人間関係を表す言葉で、親切とか恵み、慈しみといった意味です。この場合だと、変わらない誠実さ、変わらない愛情といったほうが良いかもしれません。「ですから、

娘よ、心配しないでいい。わたしは必ず、あなたの願いに答えます。あなたは町の誰から見ても、立派な婦人です。望みどおりに喜んでやります」とはっきり答えます。

しかし、ボアズはここで、一つの条件があることをルツに打ち明けます。というのは、あなたを贖う義務を負う親戚に、私よりもより近い人がいる。つまり、私よりも先に贖う責任のある人がいるということでした。もしその人がその責任を負うというのであれば、それはそういう法の定めでありま

すから、その人に責任を果たしてもらいましょう。しかし、もしその人がその責任を負いたくないというのであれば、確かに私がその責任を果たします。ですから、ボアズはルツの願いを聞いてあげたいのですが、もう一人の責任ある人がどう出るか、それを確かめる必要がありました。

夜が明けたらすぐ、その人と話をして、決着をつけましょう。ですから、今夜はこのまま、朝まで泊まっていなさい。そういうわけで、ルツのボアズへの求婚に対する最終的な答えは、夜が明けるまでお預けということになったのです。

夜明け前に二人は起きて、ボアズに求婚してくれたルツの愛に報いるために、6 杯の大麥をルツに背負わせ、ナオミへのお礼としました。人目につかぬよう、二人は暗いうちにその場を立ち去りました。ルツが帰ってきたとき、ナオミが「娘よ、どうでしたか」と聞くと、昨晚のことをすべて話します。

ナオミは言います。「そうですか。ボアズのことですから、今日中にもう一人の親戚の人と決着をつけるでしょう。あなたはその結果を静かに待っていなさい」。そこで、今日どういう決着を見るかという期待と不安のうちに、この場面は終わっています。

ルツの将来を思うナオミと、ナオミの命令に忠実に従って行動するルツと、心の思いにおいて、信仰において固く結ばれていました。先にも申しました。信仰は、この世の出来事の背後にあって隠れたところに働く神の導きを信じるとともに、他方 信仰者は自分の方から信じて行動を起こしてゆく、この両面が必要であり、両面が一つになって進むとき、そこに神の御計画が実現してゆくのです。

〔参考 1〕

家名の存続

ルツ記 3 章 9 節 「ゴーエール」 贖う人 ヘブライ語「ヤーバム」の強調形（イッベーム）はあなたの家を絶やさぬ責任のある方です。

創世記 38 章 8 節 ヘブライ語「ヤーバム」の強調形（イッベーム）は兄弟の妻をめぐって子孫を残す義務を果たす、レビラト婚をする。

申命記 25 章 5、6 節 家名の存続：亡父の兄弟が彼女のところに入り、めぐって妻として、兄弟

の義務を果たし・・・

マルコ 12 章 19 節 復活についての問答：ある人の兄が死に、妻を後に残して子がない場合、その弟は兄嫁と結婚して、兄の跡継ぎをもうけねばならない。

〔参考 2〕

真心

ルツ記 1 章 8 節、3 章 10 節 ヘブライ語「ヘセド」は好意、誠実、親切、慈しみなどの意。